

## 論文要旨

### 【背景】

臨床で求められる臨床実践能力と看護基礎教育で習得した看護実践能力にはギャップがあり、リアリティショックが問題となっている。新人看護師が困難を乗り越え、看護師として期待される責務を果たしていく過程でやりがいを感じることは重要である。また、基礎看護教育課程の学生に対して新人看護師が抱いているやりがいを示すことは、彼らが看護専門職者としての仕事の本質の一端を理解することの一助となり、かつ看護学生から臨床看護師へと変化していくプロセスを認識することにつながると考えられる。

【目的】新人看護師が看護実践の中で看護師として「やりがい」を感じるに至るまでのプロセスを記述し、構造化を図る。

【方法】本研究の研究デザインは、新人看護師の語りに基づいたグラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的記述的研究である。

研究協力者は、関東近郊にある一般病棟 7 対 1 入院基本料を算定している病院の内科系、または外科系の病棟に勤務している 2 年目の看護師 14 名。一人一回、計 14 回の半構成的インタビューを実施した。インタビュー収集期間は 2012 年 7 月～10 月。分析は、グラウンデッドセオリーの分析手法を用いた。インタビュー内容を録音、逐語録を作成し、コード化した。サブカテゴリー化およびカテゴリー化し、比較し分析を行った。分析が全数終了した後、カテゴリー間およびサブカテゴリー間の構造化を行った。

### 【結果】

インタビューの分析より、38 個のサブカテゴリーから 12 個のカテゴリーが導き出された。また、新人看護師がやりがいを感じるに至るまでの構造を、やりがいの状況、行為、帰結の 3 構造で示した。状況は【日々余裕がない中で精一杯臨床看護に取り組む】、【受け持った患者の条件から学ぶ】、【看護師が専門職者として働きやすい環境にいる】、【倫理的感受性を確認する】であった。行為は【患者や家族の思いに近づく】、【今の自分にできることをやる】、帰結は【自分の看護が報われる】、【成長した自分を確認する】、【看護師の専門的な役割を意識する】、【看護独自の力を実感する】、【自分自身を振り返り新たな目標を立てる】、【やりがいよりも看護の責任の重さを感じる】であった。新人看護師がやりがいを感じるに至るまでのプロセスの構造：新人看護師は、入職後ある程度の期間は余裕がなく、患者の看護に試行錯誤するなど困難な状況に遭遇していた。しかし、初めての臨床的対処、新人看護師にも信頼を寄せてくれる患者との出会い、専門職者として働きやすい病棟や自身の倫理的感受性の高さは、自己を肯定し、自己の価値を確認し、看護への意欲につながっていた。また、患者の看護に専心し、自己を最大限に発揮したことで患者から得られる感謝の言葉や患者の回復を見て、「やりがい」を感じていた。同時に、看護師の専門的役割の認識や自己の成長の機会となっていた。

### 【考察】

新人看護師は専門職として成長している自己を認識し、患者への看護にやりがいを見出し、同時に看護の普遍的な価値や可能性、独自の機能や役割を認識している。また、やりがいを感じることはプロフェッションフッドを育んでいくことにもつながると考えられる。看護教育において、新人看護師がやりがいを認識できるポジティブなフィードバックの重要性が示唆された。新人看護師が看護の最前線にいることで患者や家族の思いを引き受け、理不尽な思いを抱く感情労働への対策の必要性も明らかとなった。